

中川純男前会長を偲んで

八 卷 和 彦

中川純男前中世哲学会会長は、2010年4月9日、61歳の若さで急逝された。ご本人もさぞご無念であられたことと拝察されるが、現職の会長を失った中世哲学会にとっても極めて大きな痛手である。

2009年11月に富山大学で開催された第58回大会での選挙ならびにその後の委員間の互選にもとづいて本学会会長に選任され、三期目の任期を務め始められたところであった。その年の12月に、事務局が置かれている南山大学で開催された理事会で議長を務められた際にお会いしたのが、私自身がお目にかかった最後の機会であった。その時のお姿は、私が存じ上げていたいつもの中川会長と変わりなかつたので、年が改まってしばらくして、病床に臥せっておられると聞いたときには信じられなかつた。そればかりか、ほどなくして先生の訃報に接することとなり、自分の耳を疑わざるをえなかつた。病魔のこれほどの急激な進行をうらみたいという思いを、今なお禁じえない。

中川先生は、山田晶先生の京都大学における直弟子の一人として、いつからかは正確に承知していないが、永きにわたり中世哲学会の会員であられた。単に会員としてのみならず、ちょうど中世哲学会の事務局が初めて東京を離れて京都大学の山田先生の研究室に置かれた時期に大学院生であられたので、事務局幹事として本学会運営の実務において早くから貢献された。その後、1987年からは中世哲学会委員に、さらに1989年からは常任委員に選ばれた後、2006年に会長に選任されたのである。この間に1995年から2002年までは、編集委員も務めて下さっている。実に多大なる本学会へのご貢献である。学会を代表して衷心よりの感謝の意を表する次第である。

中川先生の師である山田晶元会長が中世哲学会の運営について、でき

るだけ幅広い会員に学会としての活動の機会を提供すべきであるというお考えをもち、その実現に努力されたことは、蒔苗暢夫先生の「垂範」と題する山田先生を追悼する文章（『中世思想研究』第 51 号〔2009 年〕所載）に記されている。それを拝読すると、山田先生の教え子であられた中川前会長が、学問のみならず学会の運営においても、山田先生のお考えをしっかりと受け継がれていたことが分かる。

中川前会長がとくに力を入れて取り組まれたことの一つは、大会時のシンポジウムをいかに活性化するかということであった。この点は以前から本学会大会における課題であって、テーマを会員から公募する等、いろいろと試みられてはいたが、なかなかよい結果に結びつかなかった。そこで中川会長は、シンポジウムのテーマの選定ならびにそのシンポジウムを担うパネリストの選定を、比較的若い会員たちからなるワーキンググループに委ねて、数年かけて検討してもらい、その結果をうけて理事会で検討・決定するという形をとることとされた。また、シンポジウムの成果をより豊かなものとするために、シンポジウム連動の特別報告という枠も設定された。

この試みは、すでに一定の研究成果をもつ会員ばかりが大会時の発表で主役を果たすことを避けると共に、若い意欲的な会員が自分の研究を着実に進めた上でその成果を中世哲学会という場で発表する機会を得やすくするためでもある。中川先生は学部長職等でご多忙な中を、この企画グループの会合に何度となく自ら参加され、企画検討のプロセスを見守られた。この新たな試みによる最初のシンポジウム「中世哲学とストア派倫理学」においては、中川会長自らが序説を担われたことは、われわれ会員の記憶に新しいところである（『中世思想研究』第 52 号参照）。

中川前会長のこの取り組みの背景的な事情として、1990 年代初頭に実施された大学設置基準の大綱化が中世哲学会に及ぼした影響を考えることができる。つまり、日本の大学全体において教養教育が軽視されることになり、その結果、哲学関係の授業科目が大幅に削減されることになってしまっている。このことは、一方において学生たちに、哲学、とくに中世哲学の魅力を学んでもらう機会が減少することを意味すると同時に、他方で、本学会の会員が研究者としての職場を得ることがむづかしくなっていることをも意味している。これは、学会の運営という視点

からみれば、会員の高齢化の進行と会員数の漸減としても現われることとなっている。このような状況を改善するためにも、若い会員たちに研究発表の場を積極的に開くことを、中川先生は意図されたに違いない。

学会の実務的な運営において中川先生が会長として就任早々に直面せざるを得なかったことは、学会の財政状況の改善であった。会員がまだ400名以上居て賛助会員も多数存在していた時代からの惰性で学会が運営されたことによって財政が危機的な状況に陥っていた事実には、中川会長は対処しなければならなかった。会長はこれを改善するべく、常任委員会の席上で断固たる方針を無私の姿勢をもって、しかし物静かに、委員ならびに会員に提示して承認をとりつけた上で、着実に実行に移された。その結果、学会の財政状況は中川先生が会長在任中に、目に見えて改善されるに到ったのである。

今、私は中川先生のことを「物静かに」と形容したが、たしかに中川先生はいつも物静かな方であった。理事会の運営では、少しはにかむような表情を浮かべながら議事を進められていた。しかし、議事があらぬ方向に入りこんだり、余計な意見が混じりこんだりすると、ときどきキラリと鋭い視線を浮かべられて、議事のあるべき線に戻され、そしてあるべき結果へと導かれた。

このことは、学会発表における意見交換においても同様であった。自らの意見を声高に主張するということもなく、自分をことさらに目立たせようとするわけでもなく、物静かに説得力のある意見を表明されるのが常であった。自ずからの存在感がそこに示されているという方であったと思う。

中川前会長が、すぐれた学者であられ、かつよき組織者であられたことは、多くの編著書の存在がそれを示しているところである。中世哲学会は、あまりにも早くすぐれた会長を失ってしまったのだ。

本学会の会員にも馴染みの深いバイアーヴァルテス教授は、過去の偉大な哲学者を研究することは、われわれに対して挑発、課題そして啓蒙として迫ってくる文化的記憶に触れることに他ならないと、ある講演で述べている。本年3月11日に東日本一帯を襲った巨大地震、それに起因する大津波と原子力発電所の事故がわれわれにもたらした惨劇は、今、「近代」が根本的に再検討される必要を明示しているだろう。われわれ

中世哲学会の会員は、中世哲学のもつ意味とそれを研究する意義に、静かな確信を携えながら、改めて深く思いをめぐらしてみる必要があるだろう。中川先生ならばどう教えて下さるだろうか。

深い感謝の念とともに、中川純男前会長のご逝去に心より哀悼の意を表します。